

『枕草子』「清涼殿の丑寅の隅の」章段と間テクスト性

『伊勢物語』を視野に入れて――

中田幸司

『枕草子』「清涼殿の丑寅の隅の」章段は、従来『古今和歌集』との関係から論じられたが、本稿では当時の和歌や『伊勢物語』を間テクスト性の観点から論じた。冒頭の「おそろしげなる」絵を（笑ひ）へと導く背景には当時の「うしとら」歌の存在を考慮すべきであり、続く叙述には『伊勢物語』一〇一段が想起される。『伊勢物語』の語りを『枕草子』の当該部分に照射すること、つまり間テクスト性の問題として読み直すことで詠歌の折を基準に『枕草子』の特徴を理解することができる。ここに和歌に収束した『伊勢物語』の散文と、和歌には収束せずに拡散した過程を経て和歌に到達した『枕草子』の位相差を読み取ることを指摘した。

キーワード：枕草子・伊勢物語・叙述・和歌・間テクスト性

一、はじめに

『枕草子』を論じるには、現存諸本の問題や章段分類の問題など書式や様式に関する論点がある一方で、章段内の表現に関する論点がある。

その代表的なものに『枕草子』と和歌との関係がある。たとえば、和歌が一首以上含まれている場合、その和歌表現と散文がどのように機能しあっているのか、あるいは引用されている和歌は和歌史上、どのような位置に存在するのか、などを考察することが想定される。

一方で対象とする和歌表現が五七五七七の全体なのか、一部分となる句または語句の援用なのかなどを認定していくことも丁寧に示す姿勢が求められる。つまり『枕草子』内に必ずしも五七五七七の定型として示されていない場合、会話文や地の文の地下として和歌表現が援用されている叙述もある。

この場合は既存の和歌を知ること、平板な叙述とは異なる重層性を感じさせるといえよう。このことは具体的に「殿などのおはしまさで後」章段における庭の叙述に和歌表現の援用を見出すことによって、荒涼とした景に和歌世界の風情が読みとれ、そこに定子の意向を読むことができることはすでに論じた¹⁾。

さて、前述のように『枕草子』の和歌はその示され方が多岐にわたる。そ

して和歌が存在しないと章段は成り立たないとまでいわれる²⁾。中でも「清涼殿の丑寅の隅の」章段は清水好子が「古今集の世界を、引歌本歌どりとといった言葉の上だけでなく、日常の暮らし方の上に、生活のスタイルの上で、蘇らそうとしている」と『古今和歌集』の世界を章段執筆の素材として認めたことに代表される³⁾。なお、当該章段は雑纂系統の三卷本・能因本系統においてはいずれも前段「家は」章段を、後段には「生ひさきなく、まめやかに」章段を配し、現存の章段として考えられる当該部分を「まとまりと考えるとよい。そこで以下、本稿では主に当該章段の前半部を中心に便宜的本文を示し、問題意識を明確に示しながら論じていく。

二、問題の所存

清涼殿の丑寅の隅の、北のへだてなる御障子は、荒海のかた、生きたる物どものおそろしげなる、手長足長などをぞかきたる。上の御局の戸を押し開けたれば、常に目に見ゆるを、にくみなどして笑ふ。

高欄のもとに青きかめの大きなるをすゑて、桜の、いみじうおもしろき枝の五尺ばかりなるを、いとおほくさしたれば、高欄の外まで咲きこぼれたる昼方、大納言殿、桜の直衣のすこしなよらかなるに、濃き紫の

固紋の指貫、白き御衣ども、うへには濃き綾の、いとあざやかなるを出だして、まゐりたまへるに、上のこなたにおはしませば、戸口の前なるほそき板敷にゐたまひて、物など申したまふ。

(二一段「清涼殿の丑寅の隅の」四九頁)

冒頭には清涼殿の北東の隅、北の御障子の手長足長の絵が「荒海のかた、生きたる物ども」として描かれている。この書き出しは清涼殿の丑寅の隅という限定された一部分を取りあげながら、そこでいかに「おそろしげなる」さまの絵と遭遇しても、結果として「にくみなどして笑ふ」という〈笑ひ〉を誘発する場であつたところに眼目があるう。この絵を見ることによつて憂鬱さから〈笑ひ〉を導いたのは絵そのものに要因があることは否定しないが、それが清涼殿の丑寅の隅に配置されていることも、関連があるのではないだろうか。それは『枕草子』とほぼ同時代の和歌に、

世の中をうしとらいはば片時もありへなんやぞしのぶればこそ

(『好忠集』四七〇)

ひと夜ねてうしとらこそは思ひけめうきなたつみぞわびしかりける

(『拾遺和歌集』物名四二九)

があることから想起できる。「憂し」といった心情を吐露する歌ではあるが、いずれも「物名歌」として詞書に「うしとら」(『惠慶集』・「ね、うし、とらう、たつ、み」(『拾遺和歌集』)をもつ遊戯性の高い歌に属する。ここに、「丑寅」という用語には、「憂し」といった心情を思い浮かべつつも、物名の素材として転換させることのできる語であり、憂き思いもこれら和歌の用法を知っていれば、〈笑ひ〉へと転じるきっかけをもつ手法となりえたのではないだろうか。

ちなみに、これが初めて目にした絵であり、その時の一回限りの感慨を示すとなれば、初体験なりの叙述のしかたが生じよう。たとえばそれは日常の中に生じた一瞬の衝撃となろうし、心の揺れを誘発するならば、詠作・詠歌の折ともなりうる。ところが、この絵と対峙する機会は「常に目に見ゆるを」からも幾度となく体験したことにより半ば日常化しているため、詠作・詠歌の折となるは心の揺れはかえって生じにくく、その代償としての〈笑ひ〉になっている。

さらに、この叙述に連接する「高欄のもとに」以下は注目すべきである。この一節は「高欄のもとに青きかめの大きなるをすゑて、桜の、いみじうおもしろき枝の五尺ばかりなるを、いとおほくさしたれば」と、手長足長の絵から場面は展開し、桜の枝ぶりのすばらしさがまずは示される。この花を初めてさした叙述をどのように理解するかについては先行研究もあるが、何よりも『伊勢物語』第一〇一段を想起させることを今一度指摘し、以下に本文をあげて本稿の主張を明確にしたい。

むかし、左兵衛の督なりける在原の行平といふありけり。その人の家によき酒ありと聞きて、上にありける左中弁藤原の良近といふをなむ、まらうどさねにて、その日はあるじまうけしたりける。なさけある人にて、かめに花をさせり。その花のなかに、あやしき藤の花ありけり。花のしなひ、三尺六寸ばかりなむありける、それを題にてよむ。よみはてがたに、あるじのはらからなる、あるじしたまふと聞きて来たりければ、とらへてよませける。もとより歌のことはしらざりければ、すみひけれど、しひてよませければかくなむ、

咲く花の下にかくる人を多みありしにまさる藤のかげかも

「なだくしもよむ」といひければ、「おほきおとどの栄花のさかりにみまそがりて、藤氏の、ことに栄ゆるを思ひてよめる」となむいひける。みな人、そしらずなりにけり。

(『伊勢物語』一〇一段)

『伊勢物語』一〇一段は、広く「昔、男ありけり」の書き出しが特徴といわれる同書において、「左兵衛の督なりける在原の行平といふありけり」と実名が示され、それも主人公とおぼしき業平の異母兄行平が登場する。場面は行平の家に「よき酒」があることから、左中弁藤原良近を主客として宴がもたらされた。この時、行平は「なさけある人」、つまり情趣を解する人であつたことから場にふさわしいように「かめに花をさ」した。さらに「その花の中にあやしき藤の花」があつたと語られていく。かめにさした花が藤の花一種類に限られていたかどうかは実は定かではないが、少なくとも藤の花が据えられ、その中に「花のしなひ、三尺六寸」ほどの長さをもつ珍しい藤があつたという。

まずここまでの描写を比較してみると、

『伊勢物語』 かめに花をさせり／あやしき藤の花／花のしなひ、三尺六寸ばかり

『枕草子』 青きかめの大きなるをすゑて／いとおほくさしたれば／桜の、

いみじうおもしろき枝／五尺ばかりなる

のように、花の種類や具体的な長さこそ異なるが、その叙述に示された素材として、かめに、桜ないしは藤の、花ないしは枝をさし、その長さに特徴のあったこと、が示されている。この前後の叙述においては、酒宴に集う人々に対して、大納言や主上が登場してくる点は、この花や枝を中心にし、人々の集いを示した場面として共通するともいえよう。無論、『枕草子』の作者は『伊勢物語』の存在を十分知っていたであろうことは、

天の川原、『七夕つめに宿からむ』と、業平がよみたるをかし

(六〇段「河は」)

により『古今和歌集』四一八番あるいは『伊勢物語』八二段「渚の院」にも載る、

狩りくらしなばたつめに宿からむ天の河原にわれは来にけり

の一節とともに「業平」に関する叙述があることや、また、三巻本にみる「いの物語」(七八段「頭中将のすずるなるそら言を聞きて」)が今日『伊勢物語』のこととして理解される傾向の強いことなどからも推測ができる。ここに直接の引用が認められるかどうかは確定しにくいところであるが、『伊勢物語』の語りを『枕草子』の当該部分に照射すること、つまりは間テキスト性の問題として読み直すことで詠歌の折をひとつの基準として『枕草子』を理解することができよう。⁸「間テキスト」とは、今日やや多義性をもって用いられるが、ここでは、

あるテキストが作成される際に、先行するテキストに対して、意識的に、あるいは無意識的に、与えられた影響関係を考察するための概念

ととらえておく。⁹

つまりは「引用」や「典拠」、という用語を昇華した概念ととらえたい。

さて、この『伊勢物語』において注目すべきところとは「それを題にてよめる」であろう。

三、『伊勢物語』と『枕草子』の位相差

『伊勢物語』はそもそも芳賀矢一が「歌物語」と定義付けたことを確認するまでもなく、その叙述には和歌が一首以上存在し、散文の多くは章段内の和歌を中心に収束・拡散していく。

当該章段では、冒頭で語られる行平の催した、良近を主客とした酒宴も、まずは藤の花が据えられたことによりその場は整い、題詠を参加者に求める場面へと展開する。いわば和歌の詠作を誘発する前段階に藤の花が整えられたことがきっかけとなって和歌の世界へと展開していく。このとき、見落としてはならない要因のひとつが、『枕草子』が『伊勢物語』と類似した素材によって叙述されていながら、題詠の場とは直結しないことである。いうなれば、その機を逸した叙述として見出せるのが『枕草子』なのである。これは、和歌を詠じる展開とならなかった事実の有無を単に指摘している訳ではない。類似した素材でありながら、和歌に収束した『伊勢物語』の散文と、和歌には収束せず、むしろ拡散していった『枕草子』の位相差を読み取ることが指摘できるのである。

ただし、『伊勢物語』においては題詠を求めながら、必ずしもすぐには和歌を示しはしない。このことをどのように理解すべきであろうか。ここでは「よみはてがたに、あるじのはらからなる、あるじしたまふと聞きて来たり」と行平の弟、業平とおぼしき男が登場してくるが、その「あるじのはらから」の登場以前にすでに披露されたであろう和歌はその詠作者ともども明確にはされない。そのため必然的に「よみはてがたに」具体的な人物として登場した「あるじのはらから」に注目はいき、あたかも脇役を退けて現れた主役のごとく詠作者と歌は示されていく。ちなみに、この「あるじのはらから」が業平とおぼしき男であることは初段から読んできた読者であれば推測することとはたやすい。しかし、あえて「もとより歌のことはしらざりければ」といった属性を持たせるのである。さらに、それを強調するように歌を周囲は「し

ひてよませ」¹¹⁾ ことをする。このような詠歌が一見不得手にも思われるような属性の人物像は、六歌仙として名高く「体貌閑麗、放縦不拘、略無才学、善作倭歌」と『日本三代実録』元慶四（八八〇）年五月二八日条にも残る業平像とはかけ離れている¹²⁾。

史実から離れた人物造型は語り手が語りに相応しいと判断して示したある種の虚構の姿である。そして、こうして詠まれた「咲く花の」歌は前文の行平が据えた藤の花をモチーフに用い「藤氏」を賛美する。ただし、この賛美が周囲にすぐには受け入れられなかったことが「などかくしもよむ」という周囲の疑問を抱く叙述から読み取れる。

一般に和歌が披露される時にもっとも大切なこととは作歌と折が合致し、周囲の人々に内容が理解され、共感されることであろう。その点からすれば、この歌は説明を求められるような、一見諷りを免れぬ、難あり、の歌であった。このことは前文の属性「もとより歌のことはしらざりけれ」が響いていよう。しかし、「おほきおとどの栄花のさかりにみまそがりて、藤氏の、ことに栄ゆるを思ひてよめる」という説明に応じたことにより「みな人、そしらずなりにけり」と得心、共感の結果となったのである。このような章段は歌の前述部が和歌の詞書のように詠歌に至った状況を示し、歌の後述部は和歌の左注のように歌の内容を補完した内容となっている。

さて、この展開をふまえると、桜の花を据えた『枕草子』の当該章段では「年ふれば」歌には「花」をモチーフにした歌が示され、桜の花と歌が、『伊勢物語』の藤の花と歌のように呼応しており、ひとまず花が据えられたことが詠歌の伏線として描かれている。また、歌の前述部を比較すると、双方とも人物が登場する点では共通するが、『伊勢物語』では詠作者に焦点化されるのに対して、『枕草子』では明らかに詠歌に至るまでの叙述に大納言や主上、女房たちや定子といった複数の登場人物や、その衣装の叙述に筆をさくことで、往時の場を再現することに努めている¹³⁾。特に具体的に人物を示すことにより、その属性を象徴する衣装には「桜の直衣」の描写もあり、必然的に前文のかめの桜と呼応する。

四、春歌との距離にみる散文の叙述

御簾の内に、女房、桜の唐衣どもくつろかにぬぎ垂れて、藤、山吹など、色々このまじうて、あまた小半部の御簾よりも押し出でたるほど、

昼の御座の方には、おもものまるる足音高し。警蹕など「おし」と言ふ声聞ゆるも、うらうらとのどかなる日のけしきなど、いみじうをかしきに、果ての御盤取りたる蔵人まゐりて、おももの奏すれば、中の戸よりわたらせたまふ。
(五〇頁)

ここでは女房の「桜の唐衣」をはじめとした唐衣の叙述から、やはり前述の「桜」の「いみじうおもしろき枝」と呼応させて春の一場面を示している。しかし、後文には主上の食事が用意されことを示す「おもものまるる足音」・警蹕など「おし」といふ声をきっかけに「うらうらとのどかなる日のけしきなど、いみじうをかしき」と春の日の穏やかな一場面への感慨を示すのである。

このことは、和歌を詠じる姿勢を一方で想定してみると、それとは異なる散文の叙述方法を見て取ることができよう。それは、「桜」を底流に和歌を詠じることが広く浸透している往時では、なおさらその特徴が確認できるのではないだろうか。

つまりここまで「桜」による展開や呼応の表現を見てきたが、ここにおいて主上の食事の準備に関する音がこの場面に對する「をかし」の評価を導いている。

本来、春の音といえば、春歌にも広く詠まれているホトトギスを筆頭にした鳥の鳴き声がある。しかし、「春はあけぼの」といった名言からも和歌の常識を逸脱するところに新見解を示したことで作者は評価を得ているのも事実である。無論、この音は周囲の者たちにも共有されたであろうが、ここでは作者が往時を回想し、唯一音に反応していたことが示されており、往時の場面の再現にこそ叙述の目的を見出すことができる。自然の中の素材から外れ、主上の生活の一場面に春の好季と、この場の「をかし」を再現させている。

一方で、「桜」に関する叙述の関心は、主上の登場とともに、大納言の行動によって継承されていくが、ここに「桜」を主題とした和歌に至る前段階として、作者の場の「をかし」を補完する大納言の朗詠が示されていく。

五、「月も日も」歌の機能

御供に廂より大納言殿御送りにまゐりたまひて、ありつる花のもとに

帰りゐたまへり。宮の御前の、御几帳押しやりて、長押のもとに出でさせたまへるなど、何となく、ただめでたきを、候ふ人も、思ふことなき心地するに、「月も日もかはりゆけども久に経るみむろの山の」といふ事を、いとゆるらかにうち出だしたまへる、いとをかしうおぼゆるにぞ、げに千歳もあらまほしき御ありさまなるや。(五〇頁―五一頁)

大納言は桜の花のもとで、

月も日も変はらひぬとも久に経る三諸の山の離宮所

(『万葉集』巻13・三三三二)

の結句以外をゆつくりと朗詠したのである。この歌の一節を示したことに對して諸注釈は、「新勅撰冬部」とつ宮どころの一句を略けり。萬葉集十三「月日はゆき変はれども久にふるみむろの山のとつ宮處」とある歌を、この頃にはかくいひ傳へたるなり」・「和歌体十種・万葉集卷十三・三三四五」と出典を示す中で、「伊周が中宮の意図を見抜き、年月は『変りゆけども』、昔に変わぬ(＝久に経る)皇室(＝宮所)を支える藤原一族の隆盛への『物思ひもなき』満足を、中宮と頌ちあつてゐることがわかる」などの指摘は、この朗詠こそが『伊勢物語』一〇一段の藤の花を詠みこんだ藤原氏の栄華を示すものと呼応している証左と考えられよう。

ここで大納言はなぜ、結句となる「離宮所」を示さなかったのだろうか。もちろんこの場に必ずしも相応しくはないと判断したためであることは想像しやすい。そこにはある種の配慮があるように考えることもできるのではないだろうか。当該章段の史実に関しては概ね正暦五(九九四)年の春とされている。清少納言の初出仕の翌年であり、道隆の亡くなる前年である。このとき「離宮所」(天皇の外出時の宿)という表現は中央勢力からの疎遠を想起させてしまう避けるべき語句であつたのだから。当該章段では、この後「古今和歌集」をはじめ、和歌を想起させる問答が展開する。歌わなかった「離宮所」はむしろ、周囲に無言の表明ともいふべき印象を残しかねないものであつたらう。しかし、作者はこれらも内包するかのよう、「いとをかしうおぼゆるにぞ、げに千歳もあらまほしき御ありさまなるや」と、長寿を寿ぐ朗詠部分に言及し、「をかし」の世界を保つのである。また、この意識が、後文の「年ふれば齢は老いぬしかはあれど花を見れば物思ひもなし」に

繋がっていくこととなる。

六、おわりに

『枕草子』の当該章段には和歌を関連付けることでその特徴が見出せることをここまで指摘してきた。これはここ半世紀ほどの間でいう間テクスト性の視座をもつて読み進めていこうとする、その試論ともいえるものである。とはいえ、『伊勢物語』とのかわりや、散文の叙述を相対化するために和歌による既存の知識を考えてみると、さらにそれらと一定の距離を保つことで叙述されていく展開は、この後半部に見られる『古今和歌集』といった知を駆使した回想による再現によって、より明確に読みの信憑性の高さを示すものとなる。これらについては別の稿に譲ることとしたい。

注

- (1) 拙論「殿などのおはしまさで後」章段放「平安宮廷文学と歌謡」第二十二章 四一六頁―四一八頁(笠間書院、二〇二二年)
- (2) 片桐洋一「『枕草子』の基盤は和歌」(『百舌鳥国文』一七、二〇〇六年三月)
- (3) 清水好子「宮廷文化を創る人―定子皇后の役割―」(『清水好子論文集』第三巻45(武蔵野書院、二〇一四年)、『枕草子 表現と構造』(三田村雅子編、有精堂、一九九四年)、『金蘭短期大学研究誌』創刊号(一九六六年五月) 初出。
- (4) 以下、私家集は『新編私家集大成CD-ROM版』(エムワイ企画、二〇〇八年)、その他は『新編国歌大観DVD-ROM版』(角川書店、二〇一二年)による。ただし、『万葉集』の歌番号は『国歌大観』により、いずれも一部表記を私に改めた。
- (5) 『枕草子』と折の関係については、久保本哲夫『折の文学 平安和歌文学論』四「折と和歌」1「折」と襲と晴」(笠間書院、二〇〇七年)、『王朝和歌と史的展開』(笠間書院、一九九七年) 初出、に詳しい。
- (6) 高橋由記「花を瓶にさすこと―『枕草子』第二〇段に関連して」(『瞿麦』第三号、日本女子大学、一九九六年四月)
- (7) 『伊勢物語』の本文は学習院大学蔵三条西家旧蔵伝定家筆『伊勢物語』を底本とした福井貞助校注・訳、新編日本古典文学全集『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』による。
- (8) 「間テクスト性」は一九六〇年代にジュリア・クリステヴァにより発想された概念である。土田知則「間テクスト性の戦略」(夏目書房、二〇〇〇年)、岩本一「間テクスト性―その展開と関連性について―」(『Dialogos』1号、東洋大学文学部英語コミュニケーション学科、二〇〇一年三月) などに詳しい。

(9) 能勢岳史「ヘブライ語聖書学における間テキスト性の多様性と可能性」(『神学研究』五九、二〇一二年三月)

(10) 芳賀矢一『国文学史概論』第二章「中古文学」三一頁「歌物語」(文会堂書店、一九一三年)

(11) 『伊勢物語』にはあえて詠作が不得手な一〇一段と類似した属性の示し方が続く一〇二段にもある。

むかし、男ありけり。歌はよまざりけれど、世の中を思ひしりたりけり。
あてなる女の、尼になりて、世の中を思ひうんじて、京にもあらず、はる
かなる山里にすみけり。もとしぞくなりければ、よみてける、

そむくとて雲には乗らぬものなれど世のうきことぞよそになるてふ
となむ言ひやりける。斎宮の宮なり。

(12) 津島知明『枕草子論究 日記回想段の〈現実〉構成』第二章〈あの日、の未来〉
の作り方(翰林書房、二〇一四年)、『古代中世文学論考』第二六集(新典社、
二〇一二年四月) 初出、にはこの場面に『枕草子』三段の、

おもしろく咲きたる桜を、長く折りて、大きな瓶にさしたるこそ、を
かしけれ。桜の直衣に出桂して、まらうどにもあれ、御せうとの君達にて
も、そこ近くゐて物などうち言ひたる、いとをかし。

の場面をあげ、「読者は既知感を抱かされよう」とし、「三段との対比は、二一
段の伊周初登場場面に鮮やかな彩りを添えながら、『あの日』『あの時』へと読
者をいざなうのだった」と指摘する。

(13) 北村季吟『枕草子春曙抄』(北村季吟古註釈集成、新典社、一九七七年)た
だし、実際は『新勅撰和歌集』賀部に類歌として載る。周知のように同歌集は
第九勅撰集で、下命者は後堀河天皇、撰者は藤原定家であり、貞永元
(一二三二)年六月一三日撰集の命を受けているので必ずしも初出の出典として
はふさわしくない。

(14) 金子元臣『枕草子評釋』八九頁(明治書院、一九二一年)

(15) 増田繁夫『枕草子』(和泉古典叢書)、和泉書院、一九八七年)『和歌体十種』
は『新編国歌大観』の同集解題(井上宗雄担当)に、

「忠岑十体」とも。和歌を一〇体に分類し、例歌を各五首掲げ、各体につい
ての漢文による説明を付した歌論書。序文に、木工権頭を極官とした貫之
を「土州刺史」と記すのは不審であり、また天慶八年(九四五)忠岑撰と
あるが、忠岑は九二〇年代に没したと推測されており、偽書で、内容的に
は一〇世紀末から一一世紀前半の歌論として適合されると考えられ、その
頃の成立かとする説が強い(藤平春男氏「新古今とその前後」)。

と記されており、時代としては『枕草子』成立前後となるうが、問題が残る。

(16) 渡辺実『枕草子』(新日本古典文学大系25、岩波書店、一九九一年)二二頁、
二三頁脚注。

(なかだ こうじ)

An intertextual study of a chapter in a Japanese ancient literature, *The Pillow Book* [*Makura no Soshi*], entitled “*The Northeast Corner of Seiryō Palace*”: From the perspective of *The Tales of Ise*.

Nakada, Koji

“*The Northeast Corner of Seiryō Palace*”, a chapter in *The Pillow Book* [*Makura no Soshi*] has been traditionally analyzed based on its literary relationship with *Kokin Wakashū*. The presented paper discusses this chapter with the perspective of intertextuality with other waka from the same era such as *The Tales of Ise*. For example, the opening of the chapter that begins with the depiction of a frightening picture and later ends with someone’s smile is suggestive of the underlining connections to ‘*U-shi-to-ra*’ Waka. Further, the analysis of the remainder of the chapter gives cause to consider the 101st episode in *The Tales of Ise*.

Taking an approach to the intertextually-focused chapter analyses, in other words, reviewing *The Pillow Book* in light of *The Tales of Ise* led the research team to redefine the distinctly different process in which waka is developed and presented in each episode in *The Pillow Book*.

The Pillow Book episodes present waka after the presentation of additional characters or descriptions of the setting, whereas, the proses in *The Tales of Ise* take a direct path to the final formation and presentation of waka.